る篤実の士である。私もこの奇しき邂逅（めぐり合せ）に驚いて、久し振りに語り明かした。河野家の出である一迂上人も、その家計につながる方である。臼杵藩主稲葉氏にもかかわりをもつ家柄である。

第二場面は、阿波の国「遍路ころがしの難所」、その山上にある第十二番焼山寺への中腹秋月庵の物語りになる。つづいて第三場面の、ここ第五十一番石手寺、「衛門三郎再生」につながれる。

この伝説を書きあげた人が誰かは知らないが、恐らく仏真実に近い（大師のお力なら有り得ること）ものと思われ、心の真実を表わしていると考える。

伝説は科学的証明を要求されるものではない。実際に善導教化の大きな力となっているそれらの大師伝説は、香川県だけでも八十、瀬戸内島々にまで及んでいる。四国全体では細かい資料はないが、三〇〇に近いのではなかろうか。

著名なものとしては「大師和讃」・「八十八ヶ所道歌」の中に求めても、随分沢山の奇瑞、いましめ、恩恵が織りこまれている。

句切りをつけて読誦し易い作文が、自然にリズムに乗って唱え出される和讃や御詠歌の唱声が、自分も国民をも崇高なものに浄化してくれる。

歴史を何も知らない私に、こうした行ずることの尊さを教えて貰った事が、この旅行の大きな収穫であった。

このあと「歴史上の大師」を書いて、自分の気持ちの確めをしたいと思ったが、長くもなるし、私の仕事ではないと思うようになったので、外への発表はさけることにした。

（おわり）

短歌

四国霊場巡拝の旅

会員　川田　櫻

（弥生町大字細田、浜谷）

裡深く修業大師の像おきて同行四十二人遍路の旅へ

佐伯湾あかねに染めての昏る陽に霊場めぐりの無事を祈りて

幼なくて逝きたる孫のうつし絵を抱きて霊場順拝の旅へ

ねがいごと秘めてめぐれば放生の鳩の群れにも心ひかるる

善通寺護摩たく香煙たえまなく大師御誕生の霊跡ときく

佐伯藩主寄進の燈籠に刻む文字金刀比羅宮の参道に読む

周り二十一キロ水を湛える満濃の池築きし大師が偉徳偲ばる

源平の古戦場に知る屋島浦埋立てあるを惜しみつつめぐる

霊山寺超全師の法話に涙せり終れば浮かの春
雨降りおり

勿体なや大師修業の洞窟も雨降りおれば バス
にておろがむ

とし古りし松の床柱さすりつつ十郎兵衛屋敷
で番茶をすする

人の世の極限ここに見る思い室戸岬の霊場に
佇(たたず)む

諸もろの厄除け願いつ薬王寺の賽銭散り敷く
石段を登る

うちどめの五台山竹林寺桜咲き梁のみやげに
知恵袋受くる

秋の季に妻と遍路の旅せんと白衣二着を霊山
寺に買う

俳句　黄水仙　ほか　―埋め草までに―

古寺や経堂の前の黄水仙　（四月六日　月雅寺を訪う）

にわとこのすでに茅吹くや囲い畝　（井ノ上の古戦場）

観桜や独歩の足の跡ふみて　（黒沢東光庵を訪うて）

廃坑にいまだ芽吹かずたけにぐさ　（内尾藤川内マンガン坑）

推賞

「白浪五人女」出演

これは、編集者に宛てられた私信であるが、まず、その手紙文と、ステージからの台詞（せりふ）とお読み下さい。

（上書）当ラーフケアでは毎年、熱海市内に六ヶ所ある、銀マンション管理会社で管理しているラーフケアの、合同懇親会をいたします。私も好きですから、長唄、演芸（出し物）に出演参加します。も早晩さまお齢も殆んど六十才以上の方達ばかりですから、美しさを感じさせるものではないと存じます。たまたま歌舞伎の「白浪五人男」を、ちょっと真似しました。一人の持ち時間が極く限られていますし、五・七・五口調（くちょう）にあてはめますので、思うに任せんでしたが、五人男ならぬ五人女の最後を歌った私の口上は次のようにまとめました。

「さておしまいは（私が一番しまいに口上を云いました）
はるかなる、豊後の国は佐伯にて、流れも清き番匠
に、白鷺すみて鶴谷城、いまだに残る武家屋敷、土
塀に昇るかげろうは、つわものどもの夢のあと。
明治の文豪国木田（独歩）の、詩情はぐくみ養賢の、
鐘の音ひとの世の、さだめにならいはるばると、潮
路を越えて白石（ここの地名）の、磯辺に住みて、はるか
ふたとせ、夢と情熱をかける、北村千代」（外題）

これは嬉しい。生れ故郷佐伯をせりふに織り、観衆の前に堂々と誇りをもってうたいあげる。全くすばらしいことである。この女性、実は旧姓御手洗、佐伯高女第十八回生（昭和五年三月卒業）現在熱海在住、服部千代と申される新会員。「故郷（ふるさと）は遠きに在りて思うもの」だそうな。こんな会員は大歓迎である。（無断掲載多謝―編集者）